日本18世紀学会・・・

ださい。以下、手順をあらためてご案内します。

会員の皆さまには各自「会員マイページ」が割り当てられており、各自の操作によって、以下の一連の操作が可能です。

・会員登録情報の閲覧、変更
・会費納付状況の照会
・会費のオンライン決済手続き（銀行バンクチェック決済）
・会費の請求書、領収書PDFのダウンロード
・学会からのお知らせ閲覧

また、学会からの連絡や会費納入の督促もSMOOSYを通じて一括して行うことになります。以下では、①会員マイページにログインし、登録情報を更新する方法、および②オンライン上で年会費の支払いを行う方法を再掲します。

①【会員マイページ　ログイン方法】

会員管理システム「SMOOSY」へのログインには「A-Pass」が必要です。

（1）会員マイページのアカウント確認/ログイン画面のメールアドレス欄に、 会員情報として登録しているメールアドレス（※）を入力して[次へ]ボタンをクリックします。
（2） A-Passで使用したいパスワードを入力し、認証コードを送信します。
（3）受信したメールに記載されているコードを入力して認証します。
（4）パスワードを紛失した場合に備え、パスワード再設定用連絡先を登録してください。
（5）画面の案内に沿って、A-Passのログイン情報に会員情報のメールアドレスを統合します。
（6）統合が完了すると会員マイページの全ての機能がご利用いただけます。
（7）画面一番下の［会員情報を変更する］ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

※登録されているメールアドレスは、当学会から会員の皆様にお送りしているメールの受信アドレスとなります。メールが届いていない方は事務局（ jsecs18@gmail.com ）までご連絡ください。

また、操作方法が不明な場合は会員マイページ画面右上の［ヘルプ］をご参照ください。さらに、一部の項目については、会員による変更ができません。会員種別、氏名、生年月日、入会日（不明者は1800年に設定）等です。これらについて変更を希望される方は、事務局までお知らせください。なお、賛助会員の方はマイページがご使用になれません。内容のご照会は引き続き事務局までお願いいたします。

②【年会費の支払い方法】

（1）まず会員マイページにログインしてください（①参照）。
（2）画面上で「請求名称・入金状況」を確認してください。「未入金」と表示される年度の会費の納入をお願いします。
（3）SMOOSYでの決済は、SMOOSYを運営する株式会社アトラスを通じて、株式会社ROBOT PAYMENT（ロボットペイメント）の決済代行サービス（バンクチェック）を利用しています（※）。
（4）［請求/入金情報］欄の画面右側［操作］枠の［支払う］をクリックし、
（5）明細を確認の上、［お支払いに進む］をクリックしてください。
（6）受付画面（ROBOT PAYMENTシステム）で電話番号と振込人名義を入力します（SMOOSY上で電話番号が登録されている場合は、あらかじめ表示された電話番号のままで結構です）。振込人名義欄にはSMOOSYに登録されている氏名のカナ表記が表示されていますが、お持ちの口座の名義と異なる場合は口座の名義と一致するよう変更してください。一致しないとROBOT PAYMENTシステム上で入金を確認できません。

（7）「入力確認」画面で入力事項を確認の上、［次に進む］をクリックし、「決済申し込み完了」画面で［決済申し込み］をクリックします。
（8）ここで、いったん会員マイページに戻ります。［請求/入金情報］ 欄の右側に、あらたに［振込先口座情報］のボタンが現れるので、クリックしてください。
（9）振込先口座番号の情報が現れます。以下はその一例です。各会員の振込毎に、「りそな銀行アース支店」の「ロボツトペイメントシュウノウダイコウ」名義の個別の振込先口座番号が指定される設定となっています。この口座番号は一請求につき一つずつ割り当てられるもので、同一会員であっても年度ごとに異なります。複数年度の会費が未納の方は、お手数ですがそれぞれの請求に対応した口座に入金してください。
例）

0010.りそな銀行	936.アース支店	普通.76****3.ｶ)ﾛﾎﾞﾂﾄﾍﾟｲﾒﾝﾄ ｼｭｳﾉｳﾀﾞｲｺｳ

（10）受付メールが届きます。振込先口座番号はメールにも記載されています。
（11）指定された振込先口座番号への入金は、従来のゆうちょ銀行口座への入金方法とまったく同じです。会員各自がオンライン決済なり、銀行での振込なりによって実行してください。
（12）ROBOT PAYMENTで入金が確認され次第、SMOOSYからメールで銀行振込の確認のメールが届きます（数時間、ないし土日を挟む場合は数日かかる場合があります）。なお、学会事務局にはROBOT PAYMENTから入金確認後、その都度通知が入ります。
（13）同時に、SMOOSYの会員マイページ上で［請求/入金情報］欄の該当年度の右端に「領収書を発行する」のボタンが現れます。
（14）請求書を発行する場合は、［請求／入金情報］欄の画面右側［操作］枠の ［請求書を発行する］からダウンロードしてください。
（15）領収書を発行する場合は、お支払い後、［請求/入金情報］欄の［入金済を含む全ての請求を表示する］をクリックし、［請求一覧］ 画面右側 ［操作］枠の［領収書を発行する］からダウンロードしてください。
※年会費の支払いは、事務局の負担の軽減のため、できるだけROBOT PAYMENTを介した入金をお願いします（一請求一口座の効果で、誰がどの年度の会費を払ったかが自動的に記録されます）。従来通り、学会のゆうちょ銀行口座への直接振込を希望される方は、学会事務局まで申し出てください。
学会運営の効率化と維持のため、以上、①登録情報の確認と②年会費の納入につき、会員各位のお力添えをお願いいたします。
以上、ご不明な点があれば、日本18世紀学会事務局（ jsecs18@gmail.com ）までお問い合わせください。

日本18世紀学会役員選挙について

川村 文重

当学会では、2年ごとに役員選挙が行われており、2027年はその年に当たります。今回の選挙は、前回と同様に、2022年6月25日の総会で改正された「日本18世紀学会の役員選出に関する細則」第3条2項および第7条2項の規定に基づき、電子投票で実施します。2027年3月中に投票を開始し、締め切りは2027年4月1日（木）を予定しています。投票期間が近づきましたら、被選挙者名簿とともに要領をお届けします。

第48回大会について

大塚 雄太

第 48 回大会は 2026 年 6 月 27 日（土）・28 日（日）に開催されました。関西学院大学（西宮上ヶ原キャンパス）で開催予定でしたが、台風の影響で急遽オンライン開催となりました。直前の変更にもかかわらず、久保昭博会員をはじめ開催校の皆様のたいへんなご尽力と登壇者・司会者ならびに会員の皆様のお力添えにより、接続トラブルなく二日間の日程を終えることができました。ご参加くださった皆様にあらためて深く感謝申し上げます。自由論題は 19 の発表があり、充実した議論が交わされました。共通論題は上村剛会員にコーディネーターを、菅原百合絵会員に司会をお務めいただき、「複数形のアメリカ――合衆国独立宣言 250 年を超えて」をテーマとして実施されました。入念にご準備頂いておりましたレクチャーコンサート「18 世紀の舞踏譜にみる空間と身体」は、オンライン開催への変更により実施が叶いませんでしたが、木村遥会員をはじめ関係者の皆様のご厚意により、2027 年 1 月 16 日（土）17 時より、関西学院会館風の間にて開催いただける運びとなりました。詳細は本号の別項および学会ホームページに掲載されております。皆様お誘いあわせの上、ぜひご参加ください。

第49回大会について

大塚 雄太

第49回大会は、2027年6月5日（土）・6日（日）に早稲田大学（戸山キャンパス）で開催されます。開催校担当は貝原伴寛会員、上村敏郎会員です。自由論題の発表希望者は、2027年2月14日（日）までに、以下の公募要領にしたがってご応募ください。

【自由論題発表公募要領】

第49回大会の「自由論題」で研究発表を希望される会員は、1000字以内の発表要旨をワードファイルで作成・添付の上、2027年2月14日（日）までに、大会実行委員会までメールでお申し込みください。応募先メールアドレスは以下の通りです。事務局アドレスとは異なりますので、ご注意ください。

jsecs.congress@gmail.com

採否は幹事会で審査し、大会実行委員から追ってお知らせいたします。

発表は一件につき50分、うち研究発表に40分、質疑応答に10分の予定ですが、申込者多数の場合は、発表時間を短縮するなど、調整させていただくことがあります。あらかじめ御了承下さい。大会で自由論題発表を行った会員は、当該年度の締め切りおよび次年度の締め切りの二回まで、『日本18世紀学会年報』に「大会発表論文」の投稿が可能です。

なお、非会員も当学会に入会した時点から、自由論題発表への応募の権利が生じます（入会申請は随時受付と承認を行なっています）。ぜひこの機会にご入会ください。学会ホームページから入会申請フォームにアクセスできます。

多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

国際18世紀学会（ISECS）執行委員会報告

玉田 敦子

I. サラゴサ世界大会（2027年7月）

国際18世紀学会の第17回大会は、2027年7月12日（月）から16日（金）までの日程で、スペインのサラゴサ大学にて開催される。

日時：2027年7月12日（月）から16日（金）
会場：サラゴサ大学（スペイン）
メインテーマ：「啓蒙と（不）平等（Enlightenment and (In)equality）」
※ただし、デジタル・ヒューマニティーズの活用に関する発表や、「科学的共同体としての成長（Growing as a Scientific Community）」プログラムに含まれる発表も歓迎

・現在、大会用のサイト（ https://www.isecs-zaragoza2027.net/en/en-home/ ）にて発表申込を受け付けている。
①パネルとラウンドテーブルの提案：2026年11月30日まで（締切延長）
②個人発表：2026年10月30日～2027年1月31日
③若手研究者によるポスター発表：2026年12月1日～2027年2月28日

＊発表言語は、英語、フランス語、スペイン語。暫定プログラムは2027年春に公開予定。
・参加者は事前登録（有料）が必要。登録の開始は2026年11月27日に延期された。（学生割引があるほか、2027年2月28日までに申し込んだ場合、50€の早期割引あり。）
・若手研究者、退職研究者、定職のない研究者を対象とした奨学金が用意されている（締切は2026年12月31日）。大会参加費全額と旅費の一部が支給される。申請には、個人発表の応募またはパネル・ラウンドテーブルへの参加が条件となる。

◇サラゴサは、マドリードやバルセロナから高速鉄道で1時間半ほどの大学都市。1529年にスペインとポルトガルがアジアにおける勢力範囲を取り決めた「サラゴサ条約」の地として知られますが、18世紀後半にはアラゴン王立経済協会が設立され、スペイン啓蒙の拠点の一つとなりました。旧市街には、「エル・トゥボ」と呼ばれる細い路地にバルが軒を連ね、カウンターには小さなパンに具をのせたピンチョスがずらりと並びます。日本でもおなじみのポテトサラダやクリームコロッケも、バルの定番です。発表を終えた夜に、各国の研究者とグラスを傾けながら、店ごとの味を食べ比べるのも大会の楽しみの一つとなると思います。皆様も是非、お誘いあわせの上ご参加ください。

II. 2026年ワルシャワ会議（7月9日）以降の活動報告

2026年7月9日、ポーランド・ワルシャワ大学歴史学部において国際18世紀学会執行委員会が開催され、隠岐さや香会員（国際学会副事務局長）と玉田が出席した。また11月2日には、オンラインで執行委員会が開催された。以下、両会議の主な議題を報告する。

（１）国際学会役員選挙（2027年）

2027年7月のサラゴサ大会にあわせて実施される国際学会執行委員選挙の候補者リストが、2026年11月2日のオンライン執行委員会で検討された。会長候補はシルヴィア・タッティ氏（ローマ・サピエンツァ大学）とされたほか、隠岐さや香会員（現・国際学会副事務局長）が第一副会長（First Vice President）候補として、また玉田が選出委員（elected member）の候補として推挙されている。役員の選出は国際学会における日本学会のプレゼンス向上に寄与するため、日本学会会員各位には積極的な

投票をお願いしたい。

（2）選挙手続きの整備
ワルシャワ会議では、2名の候補者（カトリオナ・セス氏、スザナ・セガン氏）の辞退を受けて、その補充が検討された。また、3名からなる選挙委員会が設置され、候補者推薦の手続きについても議論が行われた。

（3）国際学会規約・内規の改正案
執行委員会の各役職の職務と、選挙の候補者リスト作成の手続きを明確にするため、規約と内規の改正案が提案された。規約の改正は、サラゴサ大会の総会に勧告される予定である。

（4）EDI声明の採択とEDI担当者
昨年設置されたワーキンググループによる方針文書を受けて、国際学会のEDI声明の採択と、隠岐会員のEDI担当者への指名が審議された。

（5）今後の若手研究者セミナー
2027年はサラゴサ大会にあわせてスペイン国内で開催される予定である。2028年はアルゼンチン（ブエノスアイレスまたはコルドバ）、2029年はチュニジア（都市未定）での開催が提案され、11月2日の会議で討議された。

（6）中国社会科学院との共同会議
中国社会科学院との北京における共同会議の企画について、11月2日の会議で経過報告が行われた。実施方法については引き続き検討される。

（7）2031年ソフィア大会
2031年の世界大会はブルガリアのソフィアで開催される。ワルシャワ会議では、主催者のナデジダ・アレクサンドロヴァ氏、マリア・バラモヴァ氏、イヴァン・パルヴェフ氏から準備状況の報告があった。

第48回大会報告

久保 昭博

日本18世紀学会第48回大会は、2026年6月27日から28日にかけて、関西学院大学上ケ原キャンパスにて行われる……はずであった。だが折悪しくこの日に台風7号が日本列島に接近する可能性が高くなったため、本大会は急きょ全面オンラインに切り替えて行われることとなった。以下、その経緯を記す。

本大会では、19件の自由論題に加え、「複数形のアメリカ―合衆国独立宣言250年を超えて」と題された共通論題、そして関西学院会館では、レクチャーコンサート「18世紀の舞踏譜にみる空間と身体」が開催されることになっていた。充実したプログラムに加えて懇親会の参加申込も多くいただいており、幹事会と開催校のスタッフとで協力して準備を進めていたなかでの台風の報せである。遠方からやってくる会員の交通手段やホテルの予約、あるいはレクチャーコンサートや懇親会のキャンセルを考えると、開催方法の決定をあまり遅らせるわけにはいかない。だが一方で、台風の進路はギリギリになるまで分からない。なんとも悩ましい状況におかれた。

当時のメールを見返すと、23日に懇親会キャンセルの条件に関する連絡が関西学院会館からあり、慌てて大会関係者のメーリングリストに相談をしたことが分かる。その直後から主に大会実行委員とメールで相談を重ね、翌日にかけてハイブリッド案なども含めて開催方法を検討した。その一方、幹事会でも、望ましい開催形式について具体的な方法とともに検討していただいた。

最終的に全面オンライン開催が決まったのは、6月25日のオンラインミーティングである。あくまで対面を前提に準備をすすめていたレクチャーコンサートは延期とした。この段階でのハイブリッド開催は、技術面の不安もさることながら、参加者に曖昧な選択肢を与えて混乱を招きかねない。こうしたことを考えれば、オンライン開催に一本化することは最良の選択だったように思う。だがそれにしても、急ごしらえで準備をしなければならないことには変わりない。そこで私たち開催校では、レクチャーコンサート関係者などへの連絡やZoomミーティングの準備を行い、幹事会では、学会員への連絡やプログラムの修正、Google Driveを使った発表者の資料共有の準備、賛助会員の広告方法の検討などをしていただいた。なお、当日の連絡用にLINEのオープンチャットを作成し、開催校スタッフや幹事会の方々に加わっていただいた。自由論題は二つのアカウントで並行してセッションを進めたので、ここで即時的に情報共有を一元化できたのは便利だった。

このようにして迎えた当日であったが、幸いなことに二日間ともまったくと言ってよいほどトラブルなく実施することができた。オンライン開催のマニュアルを短時間のうちに作成してくださった代表幹事の武田将明さん、そして全般にわたってサポートしていただいた大会実行委員の吉田耕太郎さん、大塚雄太さんをはじめとする幹事会のみなさん、さらに開催校スタッフとして特にご尽力いただいた上田和彦さんには深くお礼を申し上げたい。こんなことを言うのもなんだが、Zoom管理のためとはいえ、二日間をとおしてずっと画面の前にはりついて発表を聴いていたので、私自身としては会場内を動き回って落ち着かない対面開催よりも集中して勉強させてもらった。直前の変更にもかかわらず、柔軟に対応して充実した発表や議論を聞かせていただいた発表者の皆さんにも感謝したい。とはいえやはり、対面で語らう喜びを得られなかったこと、そして木村遥さんを中心に長い時間をかけてご準備いただいたレクチャーコンサートを開催できなかったことは残念である。なお、延期となったレクチャーコンサートについては、その後の調整の結果、関西学院大学文学部美学芸術学研究室の主催、日本18世紀学会共催の企画として、2027年1月16日（土）に関西学院会館にて改めて開催されることとなった。多くの方にお越しいただければ幸いである。

第48回大会シンポジウムについて

上村 剛

今年度の大会のシンポジウムは、「複数形のアメリカ―合衆国独立宣言250年を超えて」というタイトルで開催した。今年で独立宣言から250年を迎え、ますます混迷を深めるアメリカ合衆国（11月には共和党が大敗した中間選挙もあった）について、18世紀研究の視点からは何が言えるだろうか、というのがコーディネーターである私の企図であった。

アメリカ革命史は、アメリカ合衆国における研究を除いて、18世紀研究のなかでは手薄な分野であり、18世紀学会でもアメリカを研究対象にしておられる会員は決して多くない。そのような状況下で、アメリカを共通論題のテーマに掲げるには、いくつかの試行錯誤が必要であった。

一つは、単にアメリカ合衆国の話にはしない、ということである。おそらく18世紀啓蒙研究者からみて、アメリカ合衆国の話は周縁のテーマと捉えられることが多く、単純に興味をひかない可能性が高いと思われた。そして、アメリカ合衆国を理解するには、アメリカ合衆国の内側だけから考えても、あまり有益ではないとも思われた。そのため、アメリカ合衆国をヨーロッパや中南米（とりわけハイチ）からの視点と併せて考える必要があると私は考えた。

同時にしかしそれは、アメリカ合衆国をその他の――とりわけ西欧の――文脈に回収し、その亜種として捉えることから逃れたいという、正反対の思考をも要求した。西欧の視座からみるだけでは、近年の歴史学にみられる西洋中心主義批判に逆行してしまうことになるし、南北アメリカ大陸やカリブ諸島を研究することの意義を、自ら否定しかねない。そのため、ヨーロッパ研究と重ねつつも、同時にアメリカの固有の面白さや研究の重要性を訴える、そんな共通論題にしたかった。

コーディネーターたる私のこの企図は、贅沢な司会と報告者の陣容によって、それなりに実現できたのではないかと自負している。私からの無茶なお願いに答えてくださった、王寺賢太先生、安村直己先生、中井亜佐子先生（報告順）は、それぞれ異なる専門分野、専門領域から、お一人お一人が複数の視点を開示してくださり、それによって、アメリカ大陸のもつ重層的な性質や、ヨーロッパとの両義的な関係について、いっそう深く理解することができたように感じる。また司会の菅原先生には、まったく異なる研究分野ながら、アメリカ建国者のひとり、G・モリスの読書会をともにしているというだけの理由で巻き込んでしまったが、報告と司会を兼ねて慌ただしい私を、うまくコントロールしてくださった。60名前後の参加者にもめぐまれ、質疑応答の時間も足りないような、充実した共通論題になった。

ただ惜しむらくは、学会がオンラインになってしまったことである。こればかりはどうしようもないことだが、私にとっても、関西学院大学西宮上ケ原キャンパスでの開催は、学会大会開催の数ヶ月前（2026年3月）まで所属していた大学での開催ということもあり、ひときわ感慨深いものであった。開催校の担当であった久保昭博先生、上田和彦先生におかれては、いきなりの変更にもかかわらず無事の開催にこぎつけてくださったこと、そしてオンラインへの変更のために、ただでさえ多忙な開催校の業務にくわえて更なるご負担を強いてしまったことに、心からのお礼とお詫びを申し上げたい。

2026年国際18世紀学会若手セミナー報告

村山 雄紀

出張申請は締切間際だった。会場はトリーア大学と把握していたが、私は直前まで、ドイツではなくルクセンブルクへ行くつもりでいた。家族に「どこに行くの？」と聞かれても、「ルクセンブルク」と答えていた。異文化間の交流について発表するのに、自分が越える国境からして心許なかった。言い訳をすれば、この春に第一子が生まれた。出張時には生後2か月ほどで、授業をこなし育児に追われながら、新しい生活をどうにか回すうちに、出発の日が近づいていたのである。

今回参加したのは、2026年6月17日から19日まで、トリーア大学で開催された国際18世紀学会（ISECS）若手研究者セミナーである。テーマは「アフロ・ユーラシアにおける宗教・道徳・社会の改革――グローバルな18世紀における知的・文化的伝統の移動（Reforming Religion, Morality and Society in Afro-Eurasia: Intellectual and Cultural Traditions in Motion in the Global Eighteenth Century）」。18世紀の思想と文化をヨーロッパ内部の出来事とする見方を相対化し、アジアやアフリカとの接触や知識の移動を通じて捉え直すことが目指された。その際、人々の往来に加え、イメージやモノ、概念などの移動と変容に注目し、帝国の拡張、植民地支配、布教に伴う権力関係を問うことが重視された。

私が行き先を勘違いしていたのにも理由がなかったわけではない。トリーアへはルクセンブルク空港からバスで向かうのが便利で、当初は私もその経路を予定していたからである。しかし、日本からの直行便はなく、乗継便の選択肢や到着時刻を考慮し、パリ経由に変更した。シャルル・ド・ゴール空港からパリ東駅へ移動し、列車でトリーア中央駅へ向かう旅程である。主催者の旅費負担を抑えたかったし、乗継地で休憩すれば移動も楽になると考えた。当初はドバイ経由を希望したが、直前に空港で事故があり、ハノイ経由を選んだ。結局、移動は予想以上に長引き、トリーア中央駅に着くころには疲労困憊していた。英語もフランス語も出てこず、挨拶程度のドイツ語ではなおさらどうにもな

らない。ホテルまでのバスを諦め、配車アプリに頼ってしまった。

ホテルに到着すると、主催者の方が、部屋の使い方から近くのレストランやスーパー、中心街や大学への道順まで丁寧に教えてくださった。帰り際には「もういいわね、子どもじゃないもんね」と言われた。メールでもよく息子さんの話をされていたので、息子の友人を迎えるような気分だったのかもしれない。私にも子どもがいると伝えたときの、彼女の驚いた顔が忘れられない。「若手」とはいえ、こちらも三十代後半だが、ずいぶん若く映っていたらしい。その親切にほっとし、部屋に入るなり、子どものようにぐっすり眠ってしまった。

初夏のドイツには避暑も期待していたが、滞在後半には40度近い酷暑に見舞われた。テレビでは、ヨーロッパでの冷房の導入をめぐる議論が繰り返し取り上げられていた。夏にヨーロッパを訪れるたび、なぜこうも熱波に出くわすのだろうと不思議に思う。パリで少しだけ会ったフランス人の友人には、「熱波を呼ぶ男」と揶揄されてしまった。そんな暑さのなか、会場へ向かってトリーア大学のキャンパスを歩いた。緑豊かな風景は、私の住むつくば市の筑波大学を思わせ、妙に落ち着く。同時に自宅のことが思い浮かび、一週間近く、子どもの世話を一人で担う妻は大丈夫だろうかと心配していた。遠くドイツまで来ても、頭の一部はつくばに残っていた。

会場はキャンパスの奥にある、年季の入った建物だった。出身大学でも迷う私には、たどり着くだけで一仕事であった。キャンパスを歩く学生に会場のD棟の場所を尋ねても、「D棟？」と考え込まれてしまう。そんななか、同じように会場を探す、筋骨隆々の精悍な印象の男性に声をかけると、やはり参加者だった。フィレンツェ大学で博士号を取得し、18世紀ヨーロッパにおけるペルシアの古代遺跡の受容を論じた博士論文を書籍にしたばかりだという。話に出てくる「シャルダン」を、私は途中まで画家のことだと思って聞いていた。旅行家のジャン・シャルダンのことだと気づき、頭の中で思い描いていた静物画をあわててペルシアの風景に掛け替えた。そんな話をしながら歩くうち、全身を黒い服でまとめた女性も加わった。コロンビア大学でシノワズリを主題とする博士論文を準備中だという彼女は、私の発表テーマにとりわけ詳しい研究者だった。会場に着く前から、翌日に控えた私の発表の心強い聞き手に出会えたわけである。さしずめ、ロールプレイングゲームなら、体格のよい男性は剣士、黒ずくめの女性は魔術師といったところだろう。仲間はそろったが、私が勇者というのは無理がある。しかも全員が道に迷っており、三人を導いてくれるゲームプレイヤーもいない。それでも研究の話をしながら、森のようなキャンパスを歩くうちに、ようやく会場へたどり着いた。

会場はまだ準備中だった。主催者に挨拶をして一息つくと、木製の窓が目に入った。さすが住宅性能で先をゆくドイツだと思いつつ、ルームツアー好きで木製サッシに目がない私は、日本製の「ノルド」や「佐藤の窓」を思い出し、そのつくりに見入ってしまった。絵画論の専門家として連想すべきは、アルベルティの「開かれた窓」だったかもしれない。確かに、窓の向こうのキャンパスには、テオドール・ルソーの《アプルモンのオークの木立》を思わせる見事な大木もあったが、何より私を引きつけたのは、窓の向こうの風景ではなく、それを縁取るサッシの方だった。

そうこうするうちに各国を拠点とする研究者が集まり、比較文献学、旅行記による異文化理解、宗教的観念の伝播など、多様な発表が始まった。異文化との接触を通じて何が伝わり、その意味がどう変わるのかという問いが、それぞれの発表をつないでいた。私は18日午前の「中国・イスラーム世界・ヨーロッパのあいだの視覚文化（Visual culture between China, the Muslim World, and Europe）」のセッションで、「18世紀フランスと中国の美的交流――魅惑と混成のあいだで（Échanges esthétiques entre la France et la Chine au XVIIIe siècle : entre fascination et hybridation）」と題し、フランス語で発表した。フランソワ・ブーシェと清朝宮廷で活動したジュゼッペ・カスティリオーネを比較し、それぞれによる図像の借用という観点から、ヨーロッパの中国趣味であるシノワズリと、その逆方向にある中国の西洋趣味であるオクシデンタリー（occidenterie）を考察した。異文化の図像が異なる制作環境で選び取られ、組み替えられる過程を問う試みである。

思想史や宗教史を専門とする研究者に作品分析を伝えるには、共有できる前提を考え直す必要があ

った。書物や宗教概念の流通とイメージの移動を並べることで、「交流」や「受容」の内実も問われる。対象が移動しても意味はそのままでは伝わらない。質疑や議論を重ねるなかで、誰が選び、注釈し、価値を与えたのか。権力関係も含め、その過程を捉える必要性を感じた。

最終日午後には、トリーア市立学術図書館（Wissenschaftliche Bibliothek der Stadt Trier）の貴重資料展示室「シャッツカマー（Schatzkammer）」と旧市街を見学した。マルクスの生家にある記念館、カール＝マルクス・ハウス（Karl-Marx-Haus）では、本セミナーの主要な参加者の一人、ジョアン＝パウ・ルビエス（Joan-Pau Rubiés）先生と記念写真を撮った。旅行記を通じたヨーロッパ人の南インド認識の形成を論じた主著 *Travel and Ethnology in the Renaissance: South India through European eyes, 1250-1625*（Cambridge University Press, 2000）は、参加前に読み、影響を受けていた。著書の博識と鋭利な分析から抱いていた厳格な印象とはうってかわって、ご本人は実に気さくで温かな方だった。カフェではコーヒーをご馳走になり、私が汗だくで歩いていると、スーパーでアイスまで買ってくださった。著者と言葉を交わし、その人柄に触れたことも、忘れがたい思い出となった。

出発前の手続きでは国を取り違え、到着後には道に迷った。それでも、道を尋ねた相手と研究の話が始まり、著作を通じて知っていた先生とも街を歩きながら言葉を交わすことができた。専門や言語、世代を越えた交流は、発表や質疑の時間だけに収まるものではなかった。研究を持ち寄り、数日間をともに過ごすこのセミナーに、関心の重なるテーマで参加する機会があれば、ぜひ応募を勧めたい。最後に、企画・運営にあたられた先生方とスタッフの皆様、参加を支えてくださった皆様に、心より御礼申し上げる。

回想・水田珠枝先生

堀田 誠三

水田珠枝先生は、わたくしにとって、最初は恩師水田洋先生のパートナーでいらっしゃった。洋先生はよく、「家へ帰れば毎日思想闘争だ」と、うれしそうにおっしゃっていた。その相手が珠枝先生というわけだ。

しかし、わたくしが何とか職を見つけると、珠枝先生は、大先輩の同僚となった。珠枝先生の最初の忠告は「ここはフランス革命以前だから」というものだった。つまり、同族経営の私学だから、いろいろと不都合なことを見聞きするだろうが、それに気を取られるより自分の勉強をしなさい、という意味だった。もちろん目をつぶって知らんふりをせよ、ということではなかった。

珠枝先生は、わたくしどもの勤務先が短期大学であった時代からの最古参の教員のおひとりだった。短期大学を4年制大学に改組するにあたっては、他の先生方と力を合わせて、いろいろとご苦労なさったと仄聞している。もちろん苦労話など、自分からは一言もおっしゃらなかった。珠枝先生には、そんないさぎよさがあった。

また社会生活のルールを大事にしておいでだった。校舎のエレベーターは、教職員だけが利用できるという決まりがあったので、学生がいっしょに乗り込もうとするのを制止したうえで、「あなたたち、こんな規則がおかしいと思ったら、規則を変えるように働きかけなさい」とおっしゃった。別に学生を扇動するのではなく、事実を事実として認めたうえで、自分の態度を決めなさいという示唆だった。普通なら学生の行動を黙認するのだが、そういう対応はなさらなかった。ささいなことをも、おろそかにはなさらなかった。

また、学部長を務められた時には、教授会と経営者との板ばさみでご苦労も多かったと推測される。けれども、経営側の意向とおぼしき案件についても、学部長の提案として教授会にはかって見えた。「本意ではないけれど、無理押しされてね」などという言い訳を聞いたことがない。今思うに、こう

いうやり方で教授会の独立と自治をたもとうとなさったにちがいない。
　教授会といえば、勤務先は小さな私学だったから、国公立大や大手の私学を退職してからおいでになった先生方が、たくさん見えた。そんなふうだったから珠枝先生は「若手」とされていた。この呼び方には、どこか人を下に見て軽んじる気味がある。それに対してやんわりと抵抗するかのように、何かの折に教授会で「国立大学なら、学部長を務める年ですよ」とおっしゃっていたのが、鮮明に記憶に残っている。また人間関係の機微にも通じて見えたから、学部長としての采配の振り方は見事なものだった。
　そのうちに、ひょんなことから、わたくしは教員の年齢順ないしは先任順という慣例を破って学部長になってしまった、そのときに珠枝先生は、学部長をやるのは「ハシカみたいなものだから、早めにすましておいた方がいいわよ」と励ましてくださった。

　珠枝先生は旅立たれてしまったが、その眼差しと話しぶりは、生きいきとよみがえってくる。

レクチャーコンサート開催のご案内

　日本18世紀学会第48回大会の一環として、2026年6月27日に開催予定であったレクチャーコンサートを、以下の要領で開催することになりました。台風のため大会がオンライン化されたことにともない、延期とされたレクチャーコンサートです。会員のみなさまにおかれましても、お誘い合わせの上、ふるってご参加ください。

レクチャーコンサート「18世紀の舞踏譜にみる空間と身体」

日時：2027年1月16日（土）、17時開演（16時30分開場）
場所：関西学院会館　風の間（　https://kwangaku-kaikan1999.jp/　）
参加費：無料
主催：関西学院大学美学芸術学研究室
共催：日本18世紀学会

当日参加も可能ですが、なるべく事前申込をお願いいたします。
申し込みフォーム｜（ https://forms.gle/BzSXLjhDzy4nspgY9 ）

なお、最新情報は「関西学院張記念館レクチャーコンサート」のWebページにて随時公開いたします。
関西学院張記念館レクチャーコンサート
（ https://www.kwansei.ac.jp/s_humanities/d_ch/aas_lecture-concert.html ）

お問い合わせ先
mail : kg.lectureconert@gmail.com
Tel : 0798-54-6212

♪　♪　♪　♪　♪

事務局より

幹事会・総会について

『学会ニュース』第106号の刊行以降、幹事会が以下の日程で開催されました。

2026年6月27日（土）　2026年度第1回幹事会

2026年6月28日（日）　2026年度総会

会員名簿の公開について

2026年度の会員名簿の閲覧方法につきましては、2026年5月30日に当学会からお送りしたメールをご確認ください。名簿に掲載する個人情報は最小限にとどめ、①氏名、②所属先、③メールアドレス（公開・非公開は選択可）、④現在の研究課題のみとしています。2027年度も5月に会員名簿の更新を行う予定です。ご所属等のご変更があった場合は、マイページから速やかな情報の更新をお願いいたします。

『年報』への論文投稿について

大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できます。詳しくは年報または学会ウェブサイト記載の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この『学会ニュース』に投書をしていただくこともできます。事務局までお申込み下さい。

共通論題のテーマ、および書評対象図書

年次大会における共通論題（シンポジウム）のテーマにつきまして、会員の皆様からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事までご一報ください。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

また、『年報』の書評対象図書についても、書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。

『学会ニュース』のエセー

第107号には、今年開催された第48回大会を振り返って、大会関係者の久保昭博会員、上村剛会員にご寄稿いただきました。また、国際18世紀学会若手セミナーに当学会から参加された村山雄紀会員にも報告をいただきました。研究紹介、海外滞在記等、テーマは自由で、1200字程度のエセーを随時受け付けていきます。会員の皆様からの積極的なご寄稿をお待ちしております。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。

寄付のお願い

寄付をご希望の方は事務局までご一報ください。こちらから振込方法についてお知らせいたします。

献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

・隠岐さや香・栗田秀法編『フランス・アカデミーの時代』（名古屋大学出版会、2026年6月）

・梅垣千尋『啓蒙と女性思想家たち　ウルストンクラフトから保守派まで』（名古屋大学出版会、2026年9月）

新入会員募集

日本18世紀学会では、新規会員を募集しています。入会希望者は学会ウェブサイトの［入会案内］からいつでも入会申請が可能であり、幹事会では随時入会承認を行っています。非会員も入会した時点から大会の自由論題発表への応募の権利が生じます。会員の皆様も、ぜひ18世紀研究に関心のある方を当学会にご勧誘ください。

幹事会メンバー（50音順）：飯田賢穂（事務局）、井上櫻子（事務局）、上村剛（事務局）、王寺賢太（事務局、ハラスメント対策委員）、大石和欣（年報編集委員）、大塚雄太（大会実行委員長）、隠岐さや香（国際学会副事務局長、ハラスメント対策委員）、金沢文緒（事務局長）、川村文重（事務局、ハラスメント相談担当委員長）、桑原俊介（年報編集委員、ハラスメント相談担当委員）、菅原百合絵（事務局、ハラスメント相談担当委員）、武田将明（代表幹事、ハラスメント対策委員長）、玉田敦子（国際学会派遣委員）、永見瑞木（年報編集委員長、ハラスメント対策委員）、吉田耕太郎（大会実行委員）

幹事会以外の委員（50音順）：出羽尚（年報編集委員）、佐藤空（ハラスメント相談担当委員）、船岡美穂子（ハラスメント対策委員）、増田都希（年報編集委員）

会計監査（50音順）：貝原伴寛、増田都希

日本18世紀学会ニュース　第107号　2026年11月発行

発行者　日本18世紀学会　代表者　武田将明

事務局　〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-33

岩手大学教育学部美術教育科　金沢文緒研究室　日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs18@gmail.com

https://jsecs.smoosy.atlas.jp/ja